

シュタイナーと モルゲンシュテルン

〔シュタイナーとモルゲンシュテルン①〕

- ・モルゲンシュテルンについて
- ・シュタイナーとの関係
- ・モルゲンシュテルン関係の講義

〔シュタイナーとモルゲンシュテルン②〕

- ・モルゲンシュテルンの詩について
- ・シュタイナーがとりあげている詩

〔シュタイナーとモルゲンシュテルン③〕

※モルゲンシュテルンについての講義から（時系列）

- ・ GA 281-13/14 (1913.11.24/12.31)
- ・ GA 261-13/14 (1914.4.10)
- ・ GA 155-7 (1914.7.14)
- ・ GA 252-13 (1914.9.20)
- ・ GA 246-72 (1915.3.28)

シュタイナーとモルゲンシュテルン①

- ・モルゲンシュテルンについて
- ・シュタイナーとの関係
- ・モルゲンシュテルン関係の講義

※モルゲンシュテルン関係の講義（時系列）

- ・GA 281-13/14（1913.11.24/12.31）
- ・GA 261-13/14（1914.4.10）
- ・GA 155-7（1914.7.14）
- ・GA 252-13（1914.9.20）
- ・GA 246-72（1915.3.28）

ドイツの詩人、クリスティアン・モルゲンシュテルン（Christian Morgenstern、1871-1914）は、ユーモラスで不条理な「ガルゲンリーダー（絞首台の歌）」（Galgenlieder nebst dem Gingganz）が有名なように、言葉遊びや風刺に富んだ独特な詩世界が特徴的で、その詩は滑稽なものから深く瞑想的なものまで多岐にわたっている。

モルゲンシュテルンは1909年、ルドルフ・シュタイナーとの出会いをきっかけに人智学から強く影響を受け、深く精神的・個人的な友情関係をむすびながら、詩人として人智学を体現することとなった。

シュタイナーはモルゲンシュテルンを「真の人智学の代表者」と呼び、死後も含めた精神的つながりを特別な仕方で語っている。

その出会いから死後の精神的なつながりまでをたどってみる。

○出会い（1909年）

モルゲンシュテルンは、1909年1月28日、ベルリン建築家ハウスでシュタイナーの講演「トルストイとカーネギー」（GA 57）を聴講。この講演に深い感動を受け、シュタイナーと直接出会い、永続的な親密な友情が結ばれることとなる。

この年、病弱な体を押しながら、デュッセルドルフ、コブレンツ、クリスティアニア（現オスロ）、カッセル、ミュンヘンなどを旅行しながら講演を聴講。

1909年5月には、ドイツ神智学協会に入会。
（妻のマルガレータはその約1ヶ月前に入会している）

両者の関係は単なる知己を超えた精神的共同体となる。

モルゲンシュテルンは元々ニーチェや神秘思想の影響を受けていたが、シュタイナーのキリスト論を中心とした講義が彼に「明確さ・方向性・確信」を与え、キリストの神秘が開示されたとされている。彼はこれを「愛・謙遜・苦しみの耐え忍び」として実践する道に進む。

○友情の深化と日常的な交流（1909～1913年）

モルゲンシュテルンは結核（母から感染）を抱えながら、病床や療養地（スイス・イタリア・チロルなど）からシュタイナーの講演を追い続けていた。（妻のマルガレータ（1910年3月7日結婚）が講演内容を伝え、精神的な橋渡し役を果たしていった）

1913年、ミュンヘン、シュトゥットガルト、ライプツィヒの講演に同行。ライプツィヒの大晦日の講演では、マリー・フォン・ジーフェルスによってモルゲンシュテルンの詩が朗読され、モルゲンシュテルンはこれを「人生最高の栄誉の日」と語っている。

講演のなかでシュタイナーはモルゲンシュテルンを「人智学の詩人」として高く評価し、。出会いの頃から、彼を「精神世界に昇華する詩人」「自然の精霊との深い親和性を持つ魂」と位置づけながら、その詩について、風刺と精神的高みを交互に織り交ぜ、人智学の理念を芸術的に体現したとして称賛している。

1912/13年の神智学協会からの分裂時にも、モルゲンシュテルンは一貫してシュタイナー側に留まり、1913年に正式に人智学協会の会員となっている。

○ 晩年の詩作と精神的影響

モルゲンシュテルンの後期詩集

（特に1914年の『Wir fanden einen Pfad』我らは一つの道を見つけた）は、人智学からの影響が色濃く、宇宙・人間・キリストの神秘を歌っている。

シュタイナーの講義内容が詩に直接反映され、「光は愛」「太陽の織物」などのイメージが登場しているように、病の苦しみを「地上の物質的生活を超えた精神的世界への回帰」として昇華させたのである。

シュタイナーはモルゲンシュテルンを「我々の運動で生きるキリストが彼の魂に移行した存在」と評し、

人智学を「魂全体で生きる」稀有な人物だったと繰り返し語っている。

○死と死後の精神的つながり（1914年以降）

モルゲンシュテルンは、1914年3月31日、
チロルのウンターマイスで結核により43歳で死去。

4月4日には、バーゼルで遺灰を自然に還す儀式が行われ、
シュタイナーが3度目の追悼演説を行っている。
（前2回はシュトゥットガルトとライプツィヒ）。

シュタイナーは「奇跡的な巡り合わせ」と呼び、
モルゲンシュテルンの魂を
「雲のような球体として宇宙的な光景を呈する」と描写。
遺灰は後にゲーテアヌムに安置され、現在も敷地内に埋葬されている。

シュタイナーはモルゲンシュテルンの死後、
その強い精神的発展が自身に新しい精神世界の知覚をもたらしたと語り
1915年のイースター講演では「生命が死に勝つ勝利者」
「死者が蘇り生き生きと生きるものの代表者」と讃えている。
モルゲンシュテルンの死はシュタイナーにとって、
地上での友情を超えた「霊的共同体」の深化の契機となったのである。

●モルゲンシュテルンに関するシュタイナーの主な講義録

○GA 281-13

1913年11月24日、シュトゥットガルト

モルゲンシュテルンの詩の朗読会（マリー・シュタイナー朗読）の冒頭で、
シュタイナーは個人的なスピーチを行っている。

○GA 281-14

1913年12月31日、ライプツィヒ（GA 281関連）

詩の朗読会冒頭で、シュタイナーは
「最も美しく、繊細で、崇高で、真実な詩が、
我々が求めるものと同じ精神・原動力を持つことを、
クリスティアン・モルゲンシュテルンの詩が証明している」と述べ、
詩人の精神性が人智学と深く一致することを強調している。

○GA 261-13

1914年4月10日、ウィーン

モルゲンシュテルンの火葬（4月4日バーゼル）直後、
講義冒頭で追悼の辞を述べている。

○ GA 261-14

1914年4月10日、ウィーン

「モルゲンシュテルンの追悼式」として最も詳細な回顧講義。

○ GA 252-13

1914年9月20日、ドルナハ

モルゲンシュテルンがシュタイナーに献呈した詩を引用し、
運動の「四重の姿（四肢体）」に十字を刻む象徴として解釈している。

○ GA 155-7

1914年7月14日、ノルショーピング（スウェーデン南東部の都市）

「クリスティアン・モルゲンシュテルンは
我々にとって生命の死に対する勝利であり、
この祭りの時期に特に立つべき存在の本質の代表者である」と明言。
死後の魂が精神世界で活躍し続けていると語っている。

○ GA 246-72

1915年3月28日、ドルナハ

モルゲンシュテルンを「生命の死に対する勝利」として位置づけ、
死後の魂が「通過した死の門を通じた魂たちの集い」に入り、
精神科学の言葉をもたらしたと描写している。

シュタイナーとモルゲンシュテルン②

- ・モルゲンシュテルンの詩について
- ・シュタイナーがとりあげている詩

●モルゲンシュテルンの主な詩集とその特徴について

モルゲンシュテルンは生涯を通じ、
抒情詩、哲学的詩とノンセンス詩、ユーモア詩という
2つの流れを並行させた詩作をおこなっている。

初期はニーチェの影響を受けた幻想的・形而上学的な作風で、
1905年頃から言語の遊び心や社会風刺を効かせた
「ガルゲンリーダー（絞首台の歌）」スタイルでブレイクするが、
健康問題（結核）やルドルフ・シュタイナーの人智学との出会いが、
後期の内省的・精神的な詩に影響を与えている。

彼の詩集は生前には約半分しか出版されていない。
死後、妻マルガレータによって多くの作品がまとめられている。
（特に『Alle Galgenlieder』1932年で無意味詩の集大成）。

以下、出版年順（主な詩集とその代表詩）とその特徴と背景について。

1. 初期期（1895～1902年）

ニーチェ影響下での幻想的・哲学的抒情詩

自然・宇宙・自己と世界の関係を探求する内省的な詩を中心に、
ユーモアを交えつつ、伝統的な抒情詩の延長線上で
神話や哲学を遊び心で詠っている。

『In Phanta's Schloß（ファンタの城）』（1895年）

『Auf vielen Wegen（多くの道で）』（1897年）

『Ein Sommer（ひと夏）』（1900年）

2. 転換期・絶頂期（1905～1910年）

無意味詩・ユーモア詩の黄金時代（Galgenliederスタイル）

言語の歪曲・造語・論理の逆転を駆使し、文法・学問・社会の常識を風刺。
代表的な「絞首台の歌（Galgenlieder）」シリーズは、
ミュンヘンの「ガルゲンベルク（絞首台の丘）」に由来するユーモア。
テキストでは表現できないが、コンクレート詩
（言葉の意味を排除し、形式・形態にこだわった詩）でもある
「Fisches Nachtgesang（魚の夜の歌）」もこの時期の作品。
（言葉なしの「〜」だけの視覚詩）

『Galgenlieder (絞首台の歌)』 (1905年)

『Melancholie (憂鬱)』 (1906年) ユーモア詩と並行して書かれた内省詩集

『Einkehr (内省)』 (1910年)

人智学影響が強まった転換期の抒情詩集。

『Palmström』 (1910年) Galgenlieder』の続編的無意味詩集。

3. 後期 (1911~1914年)

人智学影響下での精神詩・内省。

『Ich und Du (私とあなた)』 (1911年) ソネットや歌形式の内省詩。

『Wir fanden einen Pfad (我らは一つの道を見つけた)』 (1914年)

生前最後の詩集。仏教・人智学の影響が色濃く表現されている。

死の1年前に刊行され、晩年の到達点と位置づけられる。

詩集タイトル詩をはじめとする作品群は、

高山で道に迷った「私」が「他者 (Andern)」と出会い、

共同で「明確で孤独な道 (Pfad)」を見つけ、神殿 (霊的頂点) へ至る物語。

4. 死後出版の代表作 (1916年以降)

『Palma Kunkel』 (1916年)

『Der Gingsanz』 (1919年)

『Galgenlieder』 『Palmström』の続編。

『Alle Galgenlieder』 (1932年)

全てのノンセンス詩を1冊にまとめた決定版。

●モルゲンシュテルンの主な詩

○コンクレート詩

「Die Trichter」 (漏斗 / The Funnels)

※月光が漏斗の狭い胴体を通って静かに流れ落ちるイメージが、
視覚的に「流れる」ように配置されている。

最後の「u. s. w.」 (und so weiter = 以下同様) は、
詩が無限に続く (または繰り返される) ユーモアを表している。

Zwei Trichter wandeln durch die Nacht.

Durch ihres Rumpfs verengten Schacht

fließt weißes Mondlicht

still und heiter

auf ihren

Waldweg

u. s. w.

二つの漏斗が夜の闇を歩いてゆく。
 その胴体の狭められた筒を通して
 白い月光が
 静かに穏やかに
 彼らの
 森の道に
 流れ落ちる
 以下同様。

○ユーモア詩（主に『Galgenlieder』から）

「Der Werwolf」（狼人間）

※文法を題材にした作品。言語の恣意性を笑う。

Ein Werwolf eines Nachts entwich
 von Weib und Kind und sich begab
 an eines Dorfschullehrers Grab
 und bat ihn: Bitte, beuge mich!

Der Dorfschulmeister stieg hinauf
 auf seines Blechschilds Messingknauf
 und sprach zum Wolf, der seine Pfoten
 geduldig kreuzte vor dem Toten:

›Der Werwolf‹ – sprach der gute Mann,
 ›des Weswolfs, Genitiv sodann,
 ›dem Wenwolf, Dativ, wie man's nennt,
 ›den Wenwolf, – damit hat's ein End'.‹

Dem Werwolf schmeichelten die Fälle,
 er rollte seine Augenbälle.
 Indessen, bat er, füge doch
 zur Einzahl auch die Mehrzahl noch!

Der Dorfschulmeister aber mußte
 gestehn, daß er von ihr nichts wußte.
 Zwar Wölfe gäb's in großer Schar,
 doch ›Wer‹ gäb's nur im Singular.

Der Wolf erhob sich tränenblind –
 er hatte ja doch Weib und Kind!!
 Doch da er kein Gelehrter eben,

so schied er dankend und ergeben.

ある晩 一匹の人狼が
 妻子をあとに 抜け出して
 村の教師の 墓の前
 うやうやしくも 請（こ）うた問い。
 「先生、どうか わが名をば
 正しく 活用させてくださいな」

教師は ブリキの看板の
 真鍮のつまみに 這い上がり
 前足を組み 待ちわびる
 狼にむかって 説き出した。

「よろしい。
 『だれ人狼（Wer-wolf）』が 主格なら
 『だれの狼（Wes-wolf）』が 所有格。
 『だれに狼（Wem-wolf）』が与格、
 『だれを狼（Wen-wolf）』が対格。
 これにて 活用はおしまいだ」

格変化の響きに うつとりと
 狼は 目玉をぐると 丸くした。
 けれど さらにお願いだ。
 「単数だけでは 寂しい。
 複数のほうも ぜひひとつ！」

ところが 教師は うなりだす。
 そんなの 聞いたことがない。
 「狼」ならば 群れをなすが
 「だれ（Wer）」は 単数にしかない。

狼は 涙にくれて 立ち上がった。
 だって 家には 妻子がいるのに！
 （彼らが複数形にならないなんて！）
 けれど しがない狼のこと
 ただ うなだれて 去ってゆきました。

「Der Lattenzaun」（格子垣）

※垣根の「隙間」を建築家に取り出して家を建てるという、空間の逆転ユーモア。

Es war einmal ein Lattenzaun,
 mit Zwischenraum, hindurchzuschauen.

Ein Architekt, der dieses sah,
stand eines Abends plötzlich da —

und nahm den Zwischenraum heraus
und baute draus ein großes Haus.
Der Zaun indessen stand ganz dumm,
mit Latten ohne was herum.

Ein Anblick gräßlich und gemein.
Drum zog ihn der Senat auch ein.
Der Architekt jedoch entfloß
nach Afri- od- Ameriko.

昔々、あるところに格子垣があつて、
隙間があつて、向こうが覗けた。
ある建築家がそれを見て、
ある晩突然そこに現れた——

そしてその隙間を全部取り出して、
それで大きな家を建ててしまった。
その間、垣はすっかりばかみたいになっていて、
板ばかりで中身が何もなくなっていた。

それは恐ろしく下品な光景だった。
そこで市参事会はそれを取り壊してしまった。
しかし建築家は逃げ去った、
アフリカかアメリカか、どっかへ。

「Die unmögliche Tatsache」 (不可能な事実)

※論理的な形式を逆手に取ったユーモア詩。

Palmströmが「Nicht sein kann, was nicht sein darf.

(あつてはならないことは、ありえない)」と論理的に否定する。
科学・合理主義の硬直性を風刺しつつ、「夢だった」と結ぶひねり。

Palmström, etwas schon an Jahren,
wird an einer Straßenbeuge
und von einem Kraftfahrzeuge
überfahren.

„Wie war“ (spricht er, sich erhebend
und entschlossen weiterlebend)
„möglich, wie dies Unglück, ja-:
daß es überhaupt geschah?

Ist die Staatskunst anzuklagen
in bezug auf Kraftfahrwagen?
Gab die Polizeivorschrift
hier dem Fahrer freie Trift?

Oder war vielmehr verboten,
hier Lebendige zu Toten
umzuwandeln, – kurz und schlicht:
Durfte hier der Kutscher nicht –?“

Eingehüllt in feuchte Tücher,
prüft er die Gesetzesbücher
und ist alsobald im klaren:
Wagen durften dort nicht fahren!

Und er kommt zu dem Ergebnis:
„Nur ein Traum war das Erlebnis.
Weil“, so schließt er messerscharf,
„nicht sein kann, was nicht sein darf!“

パルムシュトレームは、
すでにいくらか歳をとっていたのだが、
道のカーブしたところで
車に轢かれた。

「どうして、」と彼は言う（立ち上がり
決然と生きながらえて）、
「ありえただろうか、どうしてこの不幸が——いや、
そもそもこんなことが起こったということが？」

政策は
自動車の件で弾劾されるだろうか？
警察の規定では
運転手にここの自由通行権を与えていたのだろうか？

あるいはもっと正確に言うと、
ここで生者を死者に変えることは
禁止されていたのだろうか——簡潔明瞭に言えば、
ここで運転手は許可されていなかったのだろうか？」

湿った布に包まれて
彼は法令集を調べ
そしてすぐにはっきり分かった。
車はそこを通行することを許可されていない！

そして彼は次のような結論に至る。

「この経験はただの夢だったのだ。

なぜなら、」彼は刃のように鋭くこう締めくくった、

「許可されていないことはありえないからだ。」

「Das Nasobēm」 (鼻行類 / ナゾベーム)

鼻で歩く架空の動物の描写。

生物学のパロディ (Rhinogradentia) としても文化的に引用される。

(Brehm (動物図鑑)、Meyer、Brockhaus (有名な百科事典))

Auf seinen Nasen schreitet
einher das Nasobēm,
von seinem Kind begleitet.

Es steht noch nicht im Brehm.
Es steht noch nicht im Meyer.
Und auch im Brockhaus nicht.

Es trat aus meiner Leyer
zum ersten Mal ans Licht.

Auf seinen Nasen schreitet
(wie schon gesagt) seitdem,
von seinem Kind begleitet,
einher das Nasobēm.

その鼻の上を歩いて
やって来るのはナゾベーム、
子連れで。

まだブレーム図鑑には載っていない。
マイヤー図鑑にも載っていない。
ブロックハウス百科事典にもない。

わたしの豎琴 (リラ) から
初めてこの世に現れたのだ。

その鼻の上を歩いて
(さきほども言ったように) それ以来、
子連れで
やって来るのはナゾベーム。

○人智学の影響があらわれている生前最後の詩集

『Wir fanden einen Pfad（我らは一つの道を見つけた）』（1914年）から。

「Wir fanden einen Pfad」

Ich hatte mich im Hochgebirg verstiegen.
Die Felsenwelt um mich, sie war wohl schön;
doch konnt ich keinen Ausgang mir ersiegen
noch einen Aufgang nach den lichten Höhn.

Da traf ich Dich, in ärgster Not: den Andern!
Mit Dir vereint, gewann ich frischen Mut.
Von neuem hob ich an, mit Dir, zu wandern,
und siehe da: Das Schicksal war uns gut.

Wir fanden einen Pfad, der klar und einsam
empor sich zog, bis, wo ein Tempel stand.
Der Steig war steil, doch wagten wir's gemeinsam ...
Und heut noch helfen wir uns, Hand in Hand.

Mag sein, wir stehn an unsres Lebens Ende
noch unterm Ziel, — genug, der Weg ist klar!
Daß wir uns trafen, war die große Wende,
Aus zwei Verirrten ward ein wissend Paar.

私は高山で道に迷っていた。
周囲の岩山の世界は美しかったが、
出口も、光り輝く高みへの登り道も見つけられなかった。

そこで私はあなたに出会った、最も深い苦境の中で：他者よ！
あなたと共に、私は新たなる勇気を得た。
再びあなたと共に歩み始め、
見よ、運命は我らに優しくかった。

我らは一つの道を見つけた——澄み渡り、孤独な道が、
天に向かって寺院のあるところまで続いていた。
道は険しかったが、我らは共に敢えて進んだ……
そして今も、手を取り合って助け合う。

人生の終わり近くに、
まだ目標に届かずとも——それで十分、道は明らかだ！
我らが出会ったことが大きな転換点となり、
二人の迷える者から、悟れる一組が生まれた。

「So wie ein Mensch」 （人の如く）

So wie ein Mensch, am trüben Tag, der Sonne
vergisst, —
sie aber strahlt und leuchtet unaufhörlich, —
so mag man Dein an trübem Tag vergessen,
um wiederum und immer wiederum
erschüttert, ja geblendet zu empfinden,
wie unerschöpflich fort und fort und fort
Dein Sonnengeist
uns dunklen Wandrern strahlt.

曇った日に、人が太陽を忘れるように——
しかし太陽は絶え間なく輝き、照らし続ける——
曇った日に、あなたのことを忘れることもあろう、
しかし再び、何度でも
震撼し、眩んでさえ感じるのだ、
いかに尽きることなく、絶え間なく、永遠に
あなたの太陽の霊が
我ら暗き旅人に光を放つかを。

「Brüder!」 （兄弟たちよ！）

"Brüder!"—Hört das Wort!
Soll's ein Wort nur bleiben?
Soll's nicht Früchte treiben
fort und fort?

...

Allen Bruder sein!
Allen helfen, dienen!
Ist, seit ER erschienen,
Ziel allein!

「兄弟たちよ！」——この言葉を聞け！
ただの言葉で終わらせてよいのか？
絶え間なく実を結ぶべきではないか？

.....

すべての人に兄弟であれ！
すべての人を助け、仕えよ！
彼（キリスト）が現れて以来、
それこそが唯一の目標なのだ！

○シュタイナーが講演でとりあげている詩

「Licht ist Liebe（光は愛）」

※キリストの宇宙的降臨と地球の太陽化
 ※シュタイナーは1914年のクリスマス講演でこの詩を引用し、
 「古代聖なるグノーシス思想の復活であり、
 同時にキリスト愛と宇宙的叡智が支配する」と述べている。

Licht ist Liebe ... Sonnen-Weben
 Liebes-Strahlung einer Welt
 schöpferischer Wesenheiten—
 die durch unerhörte Zeiten
 uns an ihrem Herzen hält,
 und die uns zuletzt gegeben
 ihren höchsten Geist in eines
 Menschen Hülle während dreier
 Jahre: da Er kam in Seines
 Vaters Erbteil—nun der Erde
 innerlichstes Himmelsfeuer:
 dass auch sie einst Sonne werde.

光は愛……太陽の織りなすもの
 愛の放射——ひとつの世界の、
 創造的な存在たちの——
 途方もない長い時代を通じて
 我らをその心に抱き続け、
 そしてついに我らに与えた
 その最高の霊を、ひとりの
 人間の衣（からだ）のうちに、三年の間：
 彼が父の嗣業に入られたその時——
 今や地球の
 最も内奥なる天の火：
 やがて地球もまた太陽となるために。

「Die Pflanze」（植物）
 (Das Tier, die Pflanze, diese Wesen hatten)

※魂の準備と神の口への帰還
 ※シュタイナーは1914年のヨハネスバウ基礎石記念講演でこの詩を引用し、
 モルゲンシュテルンの生涯全体を照らすものと解説している。

Das Tier, die Pflanze, diese Wesen hatten
 noch die un-menschliche Geduld der Erde;
 da war ein Jahr, was heut nur noch Sekunde.
 Jetzt geht ihr nichts mehr rasch genug vonstatten.
 Der Mensch begann sein ungeduldig Werde.
 Sie spürt: Jetzt endlich kam die große Stunde:
 auf die ich mich gezüchtet Jahrmillionen.
 Jetzt brauch ich meinen Leib nicht mehr zu schonen,
 jetzt häng ich bald als Geist an Gottes Munde.

動物と植物、これらの存在たちは
 まだ大地の非人間的な忍耐を持っていた；
 一年とは、今ではただの一秒に過ぎないものだった。
 今や何も彼らには速く進みすぎることはない。
 人間は自らの「焦る存在」を始めた。
 彼女は感じる：今ようやく、大きな時が来た——
 私が何百万年もの間、育んできたその時が。
 今や私は自分の身体を惜しむ必要はない、
 まもなく私は霊として神の口に懸かるのだ。

「Ich bin aus Gott wie alles Sein geboren」
 (私は神から生まれたすべての存在のように)

※「霊的誕生・死・再生」の循環を詠う。
 ※シュタイナーの追悼講演（GA 261）で朗読された。

Ich bin aus Gott wie alles Sein geboren,
 ich geh im Gott mit allem Mein zu sterben,
 ich kehre heim, o Gott, als Dein zu leben.

Erst wurde ich aus Deinem Ich gegeben,
 dann galt es dies Gegebne zu erwerben,
 Dir als ein Du es Brust an Brust zu heben.

Da wollte Stolz es mittendrin verderben,
 und es ward Dir, und Du warst ihm verloren ...
 Bis daß Du übermächtig mich beschworen!

Da ward ich Dir zum andernmal geboren:
 denn ich verstand zum erstenmal zu sterben,
 denn ich empfand zum erstenmal zu leben.

私は神より生まれしもの、すべての存在と同じく、
 私は神のうちに、わがすべてと共に死に向かう、

私は家に帰る、おお神よ、汝のものとして生きるために。

まず私は汝の「我」より与えられ、
次にその与えられたものを獲得することとなり、
汝に向かって「汝」として、胸と胸を合わせ高めんとした。

その途中で、傲慢がそれを滅ぼそうとし、
それは汝となり、汝はそれにとって失われてしまった……
やがて汝は、圧倒的な力で私を呼び覚ました！

その時、私は汝にとって二度目に生まれた：
なぜなら私は初めて、死ぬことを理解したから、
なぜなら私は初めて、生きることを感じたから。

シュタイナーとモルゲンシュテルン③

※モルゲンシュテルンについての講義から（時系列）

- ・ GA 281-13/14 (1913.11.24/12.31)
- ・ GA 261-13/14 (1914.4.10)
- ・ GA 155-7 (1914.7.14)
- ・ GA 252-13 (1914.9.20)
- ・ GA 246-72 (1915.3.28)

①で挙げた講演から。

○GA 281-13 (1913.11.24)

※モルゲンシュテルンの生前。

モルゲンシュテルンの詩の朗読会の冒頭において。

「私個人にとっては、ここ数日、この詩に関して非常に特別なことがありました。私は、私たちの親愛なる会員クリスティアン・モルゲンシュテルンが書いた数ページを読みました。私は告白いたします——おそらくクリスティアン・モルゲンシュテルン本人もお怒りにならないと思いますが——、ミュンヘンのパイパー出版社の年鑑に掲載された「自伝的覚え書き」という、控えめで簡素な言葉をいくつか読んだことは、稀有な喜びの瞬間であり、非常に内面的な喜びの瞬間でした。私は個人的にお話ししたいとさえ思っています。クリスティアン・モルゲンシュテルンの、愛を呼び覚ます共同体的な魂が他者と触れ合う様子を通じ、まさにその魂と共に、自分が一人でありながら世界の力に囲まれている領域に浸ることができるのです。」

「クリスティアン・モルゲンシュテルンの詩の中には、あるものが感じられるからです。それは、人間の魂が二つの方法でしか入ることのできない領域へと導くものだと思います。一つは創造者として、もう一つは創造者の魂の傍らにいることです。そうでなければ、「星」や、クリスティアン・モルゲンシュテルンの作品の中の多くの素晴らしい風景画のような詩が生み出された、人間の感情と体験の領域には、近づくことができません。そうでなければ、その領域への道は閉ざされています。」

二つ目の言葉は、私たちにより深い人生の印象を与えてくれるものです。それは、一人ひとりが個性的な存在として何であるかを、真に明らかにしてくれる言葉です。世界の中には、私たち一人ひとりの前に、詩人としての個性として立っているものがあります。それは、他のだれでもではなく、その人自身だけが入ることのできる聖域です。神々は、すべての魂のために、広大な宇宙の中に孤独で隔絶された場所を創造されました。他の者は、そこに近づくことができません。ただし、その当の人物が霊的に手を引いて聖域へと導いてくれる場合を除きます。詩人が世界にもたらそうとする、創造の何か、内面的な魂の創造の何かを、感じることができる——それが、私がこの言葉で皆さまにお伝えしたいことなのです。」

○GA 281-14 (1913.12.31)

※モルゲンシュテルンの生前。

モルゲンシュテルンの詩の朗読会の冒頭において。

「最も美しく、最も繊細で、最も高貴で、最も真実な詩が、私たち自身が求めているものと同じ精神、同じ原動力から生まれることができることを、クリスティアン・モルゲンシュテルンの詩が証明しています。真の詩、本物の芸術精神が、私たちが入ろうとしている知的な生活の領域で力を発揮するためには、心の温かさが、知的な生活の親密さに満ち、現代を脈打つように高められ、知的な生活の力によって照らされようと

する創造的な想像力へと昇らなければなりません。そして、私の感じるところでは、クリスティアン・モルゲンシュテルンの詩はまさにその通りなのです。」

○GA 261-13 (1914.4.10)

※モルゲンシュテルンの火葬（4月4日バーゼル）直後、講義冒頭での追悼の辞。

「先週の土曜日、4月4日午前11時、私たちは親愛なる友人クリスティアン・モルゲンシュテルンの遺体をバーゼルで、かの地の私たちの建物に近い場所で、元素に還しました。ほとんど奇跡的と呼べる運命の巡り合わせにより、私は親愛なるクリスティアン・モルゲンシュテルンについて、人智学の友人たちの集まりでこうして三度目に語ることになりましたが、今度は彼の地上の遺体を元素に還す直前の瞬間にお話することになりました。

すでに二度——一度はシュトゥットガルトで、一度はライプツィヒでの連続講演の機会に——私は、私たちの人智学運動の中心で、クリスティアン・モルゲンシュテルンを長年にわたり、どれほど心からの感謝と愛をもって見てきたかを指摘する機会がありました。ですから今日は、彼の人智学仲間である皆さまに、フォン・ジーフェルス夫人が、まもなく出版される予定の、素晴らしい最晩年の詩の一部をお読みになる前に、少しお話ししておきたいと思います。」

「私たちは彼の物理的な最期のときにも、ある痛みとともにそこにいました。私がスイス滞在中の彼にチューリヒで会ったとき、彼の声はすでに嘎れ、肉体はもはや声を響かせる力を失っていました。嘎れ声が彼の言葉を覆っていました。しかしクリスティアン・モルゲンシュテルンにはもう一つの言語がありました。稀有な言語——ごく少数の人々の目を通してのみ輝くことができる、あの素晴らしい目の言語です。魂がその目を通してどれほど多くを語れるかを、私たちは感じました。そして多くの瞬間、彼だけが持つ語り方を通して、どれほど多くを語れるかを感じました。私たちはもう彼とこの言語を交わすことはできません。それが私たちの痛みでした。私たちは彼をとっても愛していたからです。しかしそれこそが、私たちが彼をますます愛し、私たちの精神的な能力に応じて忠実に彼と結ばれる理由となることでしょう。彼は私たちの間で模範として生き続けます。そして私たちが「最高の人智学者とはどのような人か」と自問するとき、最初に思い浮かぶ名前の一つとして、私たちはこう答えるでしょう。「クリスティアン・モルゲンシュテルン！」と。

ライプツィヒで、まだ彼の面前でお話しできたとき、私は彼の詩の中の、私たちの世界観が響いている一つの言葉を使うことが許されました。私は心の底からその言葉を語ります。なぜならその言葉の真理を深く感じるからです。クリスティアン・モルゲンシュテルンの詩——後ほどその一部をお聞きになれるでしょう——は、思想や感情で表現されたものだけではなく、それらに宿る魂の生活、しばしばオーラと呼ぶものによって私たちに語りかけます。彼の詩にはオーラがあるのです！私はしばしば、彼の詩が生きている存在であると感じました。クリスティアン・モルゲンシュテルン自身がそうしたように、彼の魂、彼が私にとってとても愛おしくなった魂に深く入ろうとするとき、そしてその愛によって親密な理解を得たときに、私は彼の素晴らしい多くの詩が導くところ——この孤独な島へと——魂とともに赴こうとしました。彼の詩のいくつかは、私たちを孤独な島へと導くようですが、そこは宇宙を流れるものと一つになれる島です。そしてクリスティアン・モルゲンシュテルンが、世界精神の響きを自らの中に感じながら、魂の島で彼の素晴らしい響きを響かせるとき、彼に続くことができる人だけが彼を理解することができました。よく言われることですが、「詩人を理解したければ、詩人の国に行かなければならない」のです。クリスティアン・モルゲンシュテルンは精神の詩人です。この精神の詩人を理解したければ、精神の国々、霊の国々に行かなければなりません。後ほどお聞きになる詩の中のいくつかの響きはオーラを放っています。それはまるで、すでに精

神世界から語られたかのようにです。自分が完全に精神世界にいることを自覚している魂によって、精神世界にいることを許された魂によって語られたかのようにです。その魂はこう言うことができました。

「あるいはそれは、同じ力が、物理的平面において彼から去った後、それ以来精神的に彼の人生に伴い、物理的世界で彼に与えなかったものを、今や精神的世界から、休むことなく彼を高く人生に引き上げ、人生の高みへと導くまで、忠実に与え続けたのです。そこで死は刺を失い、世界は再び神聖な意味を取り戻したのです。」

私たちはそのとき、クリスティアン・モルゲンシュテルンの地上の遺体を元素に還さなければなりませんでした。そしてまさに、彼の最高の精神的な希求を明らかにするこれらの詩が世界へと送り出されることを、私たちは期待しています。私たちは、これらの詩が多くの魂の最も内奥の深みを揺さぶり、多くの多くの魂がこれらの芸術作品を最も深いところで体験し、それによって魂を精神の領域へと導くことを期待しています。」

○GA 261-13 (1914.4.10)

※モルゲンシュテルンの追悼式

「彼は精神の高みに、自分の母国——精神世界、母なる大水——を見出し、そこに連れ帰られました。彼は故郷に帰りました。しかしそれは、私たちの魂が最も強い力で根を張っている故郷であり、人生の祝祭的な瞬間においてさえ、単なる感覚的な出来事から遠ざからざるを得ないときに根を張っている故郷です。

これが、私がここで、クリスティアン・モルゲンシュテルンに対する自分の精神的な考察から湧き上がる言葉として述べたいことです。彼は、大きな苦闘をし、精神として肉体に対する勝利のために戦い、多くの人々と多くの世界観を体験した一人の人間の魂の中で、私たちの世界観がどれほど効果的に働いたかを示す美しい紋章として、私たちにこれらの詩を残してくれました。そして地上での最後の日々においてさえ、次の言葉を語ることができました。

「実際、私が少しも、ほんのわずかも迷うことのなかったものは、ただ一つだけです……」

クリスティアン・モルゲンシュテルンが意味したのは、私たちも信奉しているこの世界観のことでした。

親愛なる友人たちよ、私たちは確信したいと思います。それは彼が導いている精神の生活の中で彼と共にあり続け、私たちが見上げたいと思うものであると。」

○GA 155-7 (1914.7.14)

「彼は肉体の困難な状況のため、長期間、私たちの運動から空間的に離れていました。スイスの山奥の孤独な場所や、健康のために勧められた他の場所にいました。しかし彼は、どれほど遠く離れていても私たちの運動に結びつき続け、最近人智学のあるサークルで繰り返し朗読されている彼の詩は、私たちが10年以上にわたって人智学で展開してきたものの、詩的な反映であると言えます。

今、彼は死の門を通過しました。そしてこの魂に対する神秘学的な観察から、非常に注目すべきことが浮かび上がってきます。彼の病んだ肉体の中での魂の生活の意義は、死後に初めて明らかになりました。私たちの運動の進展のために忠実に働いていたこの魂は、徐々に死にゆく肉体の表面の下で、非常に大きな力を吸収していました。この力は、魂がその肉体に宿っている間は病んだ肉体によって隠されていましたが、死

後にこの魂の前に立つと、精神生活の中でしか輝き得ないように、その人生で吸収した内容が輝き出します。私たちの友人が死の門を通過した後、今生きている雲のような球体は、壮大な宇宙の全景図として現れます。神秘学的な観察者にとって、これは非常に印象的な光景です。

神秘学的な観察者は、宇宙世界の広い球体全体に視線を投げかけることができます。しかし、宇宙世界全体を眺め回すことと、特定の人間の魂から切り離されて、霊的世界に本来あるものを絵画のように映し出した壮大な全景図を見ることは全く別のことです。私たちが物理的世界を周囲に見、続いてラファエロやミケランジェロの壮大な絵画にそれが反映されているのを見るのと同じです。ミケランジェロやラファエロの絵の前に立って「この絵は何も与えてくれない、現実の世界をすべて見られるのだから」と言う人はいません。それと同じように、霊的現実を直接観照する代わりに、魂の中でそれを映し出す全景図を見ると、この魂の絵は無限の豊かさであると言えます。そして、この友人の前に立つことで、私たちが長年にわたり霊的世界から述べてきたすべてのものを、彼の魂が反映として内に含んでいることから学ぶことは、霊的現実の広大さを直接観照するよりもはるかに多いと言えます。」

「私たちの友人の魂が死後にどのような姿になったかを見ることは、神秘学の世界からの一つの保証です。なぜでしょうか。私たちの友人は、『我らは一つの道を見つけた』という詩集を残しましたが、死後、彼は巨大な宇宙の全景図の中に生きています。それは彼にとって一種の魂の身体のようなものです。彼が私たちと結びついていたとき、彼は私たちのキリストについての学びを吸収しました。彼はこの人智学の学びを魂に結びつけ、魂の精神的な心臓の血となるまで取り入れました。彼はそれを、キリストの実体で満たされたものとして受け取りました。キリスト存在が学びを通じて彼の中へ流れ込みました。私たちの運動に生きるキリストが、彼の魂にも移りました。

この神秘学的事実を観照すると、次のことが浮かび上がります。死の門を通過した人は、このような宇宙の全景図の中に生きることができ、それを携えて死と次の受肉の間の生活を進んでいきます。それは彼の全体的な存在に働き、具現化し、あるいはむしろ「魂化」し、再び地上生活に降り立つときに新しい地上生活を貫きます。また、そのような魂は自分自身の生のための完成の萌芽を受け、地球存在の進化の中で前進します。

これらすべては、その魂が学びを自分の存在の中に吸収したために起こります。しかしこの特定の魂は、すべての学びを、キリスト存在によって浸透され精神化されたものとして受け入れました。私たちが自分自身のものにできるキリスト存在の概念によってです。この魂が吸収したものは、単にこの一人の魂のさらなる進化を刺激する宝物ではなく、すべての人のためにあるキリストを通じて、再び全人類に働きかけます。そして、今年の春に死の門を通過した彼の魂の中で、霊視する目に展開されているあのキリストで満たされた魂の全景図は、私にとって今日、霊的世界から語られるものが、キリストの愛を通じて後の魂たちに放射し、彼らを燃え立たせ、靈感を与えるという保証です。私たちの友人は、自分自身のより大きな完成のためにキリストで満たされた人智学の学びを前進させるだけでなく、それが彼の存在の一部となったために、精神世界からの衝動として、これから来る世紀に生きる魂たちに注ぎ込みます。彼らの中に、キリストで満たされたものが光線となって流れ込みます。私たちの魂は、自身のためだけに最も尊い所有物であるキリストで満たされた精神科学を取り入れるのではなく、それをこれから来る文明の時代を通じて担っていくのです。この学びをキリストで満たすならば、それはキリスト存在が全人類に属するがゆえに、全人類全体への種子として流れ出します。キリストのいるところでは、生命の宝物は孤立しません。個人のための実り豊かさは常にありますが、同時にそれは全人類のための宝物となります。

私たちはこれを魂の前に明確に置かなければなりません。そうすれば、キリストで満たされていない叡智と、キリストの光によって照らされた叡智との間に、どれほど重大な違いがあるかが分かります。私たちが

協会のより狭いサークルで集まるとき、それは抽象的な考察のためではなく、現代世界がそれに対して何と言おうとも、真の神秘学的な認識を育てるためです。したがって、霊的領域での研究によってのみ得られる事柄に触れることができます。」

○GA 252-13 (1914.9.20)

「クリスティアン・モルゲンシュテルンは、私たちにとって「生命の死に対する勝利」です。彼は、この祝祭の季節に特に私たちの前に立たなければならない本質の代表者です。すなわち、すべての死せるものが復活し、生命を得るということです。そして今日、導入として、クリスティアン・モルゲンシュテルンに体现された魂のこの生き生きとした生命について、少しお話ししたいと思います。」

「クリスティアン・モルゲンシュテルンに体现された魂が霊的世界に入ったことは、霊的世界にとって一つの出来事でした。率直に言えば、ある意味で霊的世界に「時代」を画した出来事だったと言えます。ここ数世紀の間に、特徴的な個性を持つ魂たちが地上から去っていきました。地上を去った最も特徴的な個性たちは、地上の地平線の周りで観察できるすべてのもの、地上で考えうる最も優れたすべてのものに深く通じた魂を持って去っていきました。偉大な精神たちが地上を歩み、人間的な地上の思考は集中的に発展しました。この人間的な地上の思考は、生命の親密な物質的過程を照らし出しました。それこそが、ここ数世紀の特徴でした。人間の地上の精神は、生命の物質的な秘密に集中的に輝きを投げかけることができたのです。」

そして、明らかに強く地上の知識を持って死の門を通過した魂たちがいました。彼らは、地上で知的に到達しうるものを、無限に多く霊的世界に持ち上げました。しかし、おそらくこれまで、地上の知性が征服しうるものでありながら、霊的世界には意味を持たないもの、感覚的世界を説明するためのもの、感覚的世界の深い精神的な秘密を明らかにするものが、これほど多く、特に卓越した魂たちによって死の門を通じて霊的世界に持ち上げられたことはなかったでしょう。感覚的世界もまたその起源を精神に持つものである限りにおいてです。

とりわけ最も卓越した精神たちにとって、死の門を通過して入った環境は、彼らの精神的な感覚や精神的な理解力に対して、奇妙な現象が輝き出す土地でした。彼らは内なる視線を地上に向けなければ、自分たちが何であるかを全く認識できない状態でした。格言的に言えば、次のように言えます。私たちは霊の国に、死の門を通過し、地上存在の最も卓越した諸相を霊的世界に持ち上げた魂たちの集まりを見ます。その輪の中に、クリスティアン・モルゲンシュテルンの魂が入ってきたのです。その魂は、精神科学的なもの——直接的に言えば精神の言語——に対する最も内なる衝動を備え、すでに地上において、感覚を超えたもの、超感覚的なものを体験しようと努めていました。それは魂の力によって地上の人を同時に活気づけ、燃え立たせるものであり、死の門を通過したときに霊の国で魂に向かって輝き出すものに対して、最も卓越した意味において魂を受容的にするものでした。

そして、地上で霊の国にふさわしい生命を身につけた明るい星のように、クリスティアン・モルゲンシュテルンの魂は、そうした星に対する視力をすでに曇らせていた者たちの真ん中に入っていました。過去数世紀の最も卓越した精神たち——フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなど——の多くが、死の門を通過してこう言うことができました。「地上の理解力で地上の秘密を測り、探究しましたが、今私たちを取り囲むものに対する理解は空虚のままでした。『霊の国における生きた人間とは何なのか』という大きな意味深い問いに答えるものは、不毛で空虚なままでした。」

地上でクリスティアン・モルゲンシュテルンに体现された精神は、人間が精神の言語と親密に結びつくことによって、実際に何であるかを、彼らの輪の中に持ち込みました。ヘーゲルやフィヒテはこう言うことが

できました。「私たちは地上で、地上の秘密を説明するものを究めようと努めました。しかし、地上の精神から、地上の知識の深い坑道から引き出した概念のすべてをもってしても、ここで私たちの前に置かれた問いに答えることはできませんでした。『人間とは何なのか？ 宇宙全体の文脈の中で、真実の人間とは何なのか？』——さあ、ここへ来て、人間が何であるか、彼が私たちに何をもたらすか、彼がすでに地上で天国のために何を準備してきたか。それを私たちに説明してください。一人の人間、一つの人間の星として！」

彼が何であるか、彼が霊の国に対してどのように生きているか——それを、今週の初めに、魂の前に置かなければなりません。この週は、祝祭的に生命の復活を私たちに象徴するものです。私たちの親愛なる友人クリスティアン・モルゲンシュテルンの魂がどのような霊の国のものであるか、それを今週、私たちの心に導き入れましょう。そうすれば私たちの心は、彼を観想する中で、感謝の祝祭を祝うことができます。彼は長年にわたり、私たちの精神科学の流れの中にいて、それを豊かにし、活気づけてくれました。そして近年、彼が魂の中で発展させたものを通じて、彼の霊の国への参入が、意味深く、深く効果的なものとなったことを、私たちは知ることができます。

私はただ、クリスティアン・モルゲンシュテルンに体现された魂が、霊の国にとって——そして私たちにとっても——どのようなものであるかのイメージを、ここに提示したいと思います。このイメージが、これから迎える復活祭の週を通じて、あなたがたの心の中に生き続けますように。そして、クリスティアン・モルゲンシュテルンが何であったかが、あなたがたの心の中で復活することを願いたいと思います。

クリスティアン・モルゲンシュテルンを、感謝と神聖な観想をもって、特に彼の死の一周忌であるこの復活祭の週に、感じと感情を燃え立たせるために、彼自身が地上で創造したものの一部をもって、私たちに語りかけてくれることを願っております。」

○GA 246-72 (1915.3.28)

※モルゲンシュテルン一周忌、復活祭にあたって。

「今週の復活祭の週は、私たちの親愛なる友人クリスティアン・モルゲンシュテルンが、物理的平面から霊的世界へと旅立った一周忌に当たります。私たちは精神科学を通じてその霊的世界を知ろうと努めています。これまで私は、クリスティアン・モルゲンシュテルンが私たちの精神科学の流れの中にいたときに、彼が私たちにとってどのような存在であったかを、幾度か描写しようと試みました。彼は豊かな精神と魂の充実をもって、卓越した詩的才能を発揮し、私たちの精神運動に豊かな実りをもたらしてくれました。また、彼の魂が別の存在様式を取って以来、彼の霊視的な能力がどのようなものになったかについても、すでに述べてきました。彼はまさに、私たちが霊の国に住む助け手として仰ぎ見るべき個性の一人であり、亡き友人たちにどれほど感謝すべきかを、特に意識に上らせる存在です。」

「クリスティアン・モルゲンシュテルンは、私たちにとって「生命の死に対する勝利」です。彼は、この祝祭の季節に特に私たちの前に立たなければならない本質の代表者です。すなわち、すべての死せるものが復活し、生命を得るということです。」